

人間の価値

By David C. Moreton (翻訳) 桐野直子

私の人生や日本のメディアに最近起きたいくつかの事件から、私たちがお互いを仲間としてどう扱っているかについて考えるようになりました。テレビや新聞では、毎日のように、児童虐待や子供による殺人、会社の不祥事、詐欺などの報道がなされています。私自身の生活では、第二次大戦中の日本軍捕虜としての体験を書いた祖父の日記を読んだり、四国の遍路道の研究を続ける中で、私は人々が自分や相手をどのように扱っているか比べるようになりました。

相手を平等に扱ったり尊重したりする気持ちはどこへ行ってしまったのか時々考えることがあります。私たちは自分や他人を尊重しているでしょうか。中古車や新品のテレビなどのようなモノに価値を置くことは比較的簡単ですが、人間の価値とは何なのでしょう。私たちはお互いにとっていくらの値打ちがあるのでしょうか。他人をまるで価値がないように扱い、そのためにその人の人生を肉体的、精神的にめちゃくちゃにしてしまうような人がいることは明らかです。では、私たちの価値とは何なのでしょう。私たちは自分の価値をどこで、どのようにして学ぶのでしょうか。自分をまるごと受け入れてくれる場所、つまり人が対等なものとして、尊敬の気持ちを持って受け入れてもらえるような場所はどこにあるのでしょうか。

私の祖父は1942年2月から1945年の8月までの間、イギリス人兵士として日本軍の支配下にある捕虜でした。祖父はタイとビルマの間の400kmにおよぶ泰緬鉄道の建設に強制労働させられた、たくさんの捕虜の一人だったのです。祖父はその抑留期間中、密かに日記をつけていたのですが、その日記はこまごまとした日常生活、収容所や捕虜仲間の状況、日本兵から受けた扱いとそれらに対する祖父自身の感想の記録となっています。戦後に書かれた日記に以下のような記述があります。

=== (以下は既約の挿入)

一年前の今頃は私はまだ戦争捕虜で、この1ヶ月の間、わたしたちは500人の男たちとクレイン・クライに向けて移動していた。それはまさに悪夢だった。雨が降り、道はぬかるんでいた。服はぼろぼろで、体中が汗くさく、睡眠を取るために、鱒が並べてるように線路の枕木に並んで寝た体は、蚊に刺されまくっていた。男たちの顔には、裸足の行軍が終わったらこの労役から解放されるという、最後の望みが見える。しかし、我々が勝利するという望みをいつも掲げていた。

===

祖父とその捕虜仲間が長い間耐えなければならなかったこういう状況は、想像するだけでもあまりに悲しいことです。祖父は下痢、脚気、マラリア、デング熱、甲状腺腫に苦しみ、歯を何本も抜いたり、輸血をしたり、盲腸の手術までしたのです。祖父の日記は他の多くの日記と同じく、日本兵の残忍さと、連合軍の捕虜や地元の労働者が人間以下のもの、働いて死んでも当然の、価値のないものとして扱われた様子を物語っています。しかしながら、祖父の日記は苦しいことばかりを書いているわけではありません。日記には同情の言葉を口にする日本人も、祖父を価値あるものとして扱ってくれた日本人も登場します。たとえば、1944年の初めごろの日記には、ある日本人の医者が、「1年以内に戦争は終わります。あなたは国の奥さんや子供さんのところに帰ることができるよう健康に気をつけなさいといけませんよ」と言ったことが記されています。1944年5月25日には、「私たちと同じようにほとんどの日本兵が戦争にはうんざりして国に帰りたいたいと思っているのです。」という人もいました。こういう言葉がどれほど苦しい状況に耐える祖父の力になったか想像するのは難しくありません。暗闇の中でそのような言葉を聞いたとき、たとえ一時的であっても価値あるものとして扱われたことをきっと嬉しく思ったことでしょう。

興味深いことに、祖父と私はともに、自分の意思で日本人と関わるようになったわけではありません。そしてさらに私たちは二人とも、日本人から対等に、あるいは十分な敬意を持って接してもらっていないと感じていました。こういう感じについて、

私は14年前に、日本語スピーチコンテストで話したことがあります。そのときのタイトルは「人間の価値」でした。スピーチの冒頭で、私はバンクーバーのサイエンス・センターで経験したことを紹介しました。そのセンターには大変珍しい体重計があります。その体重計に乗ると、体重によって、体内のカルシウムや水分やミネラルの量に基づいてその人の社会的価値が示されます。私の場合は、5ドル（およそ500円）と出ました。大変なショックでした。「これが私の本当の価値？」私は聴衆に尋ねました。スピーチの残りの部分で、人を肌の色や鼻や足のサイズなどで判断したり価値を計算したりするのではなく、身体特徴を通り越して、同じ人間として理解するようにしないといけないことを強調しました。また、日本人は私を日本人社会に受け入れず、鼻が高く足のでっかい白人、別の言葉でいうと外人、つまり「外の世界」から来た人としてみているように感じることも話しました。しかしながら、嬉しいことに、その後この印象は変化し、私たちの間の「壁」が少しずつ消えていったような気がします。

とはいえ、多くの人々、とくに初対面の人、私が白人（おそらくアメリカ人と思っているのでしょう）だからとか英語をしゃべるからという理由で、私の価値を判断します。それはまるで、私の存在が、「同じ人間として」よりも、英語をしゃべる人、「英語の練習台になる人」としての価値のほうが勝っているように思えます。一人で本屋に行って本を探しているとき、信号待ちしているとき、カフェで休んでいるとき、あるいは食料品を買いに出たときなどの折々に、誰かが私に近づいて次のうちのどれかの質問を投げかけます。「アメリカ人ですか。」、「どこから来ましたか。」、「あなたは日本が好きですか。」最初の2、3年間、私は丁寧に英語で答えましたが、そうするとさらなる質問が飛んできます。そうやって私は質問攻めの罠に陥るのでした。いまは、こういう事態が発生した場合は、私はよく日本語で質問者に答えることにしています。こういうことは白人以外の外国人には起こらないことに私は気づいています。どうしてでしょう。日本人の目には白人の価値は高いのでしょうか。英語のネイティブスピーカーは価値があるのでしょうか。

価値あるものとして人に接することは、異なる人種や異なる国の間でのみ起こるわけではないことを忘れてはなりません。祖父の日記に、「この捕虜生活の中で、私は人間の本性を見た。人を騙したり騙されたり、人よりも多く手に入れようとするのは日常茶飯だった」と書いてありますが、これは日本兵のことではなくイギリス兵士の行動です。またあるときは、ビルマの前線から戻ってきた病気の日本人兵士が日本軍から虐待を受けて放置されているのを見ました。今日の社会でも、似たような例がたくさんあります。たとえばいじめ、キレる子供、子供の虐待などで、そういった問題が日常的にニュースになっていますが、どうしてこんなに多いのかなーと思います。人に対してどうしてそんなにひどい態度がとれるのでしょうか。これは仮説ですが、暴力的なテレビゲームをしている子供は、ゲームの世界と現実の世界の見分けがつかなくなるといわれます。子供は切れやすくなり、暴力に対して麻痺してくるのです。小学生に対して行われたあるアンケートを見て驚いたのですが、小学生のほぼ五人に一人は、人は殺されても生き返ることができるかと信じているのです。「リセットボタンを押して、もう一度スタートすればいいよ。」

日本人は古くから障害者や病人などのマイノリティを遠ざけてきました。1990年代の初め、私は障害のある子供たちと一緒にボランティア活動をする機会があり、子供たちと近所の幼稚園で週末に一緒に遊んだり、夏や冬にキャンプをしたりしました。こういった活動に参加するのは楽しかったのですが、お寺の境内から外へ出た瞬間に人々の批判の目にさらされるという事実は興味深いことでした。私たちを見る人々の目と表情が私たちの値踏みをしていました。しかしながらこの20年余り、人々の態度が変わりつつあり、障害者だけでなく、これまで健常者の外にいると考えられてきた人々が、一般社会の一員として受け入れられるようになったのはすばらしいことです。

敬意を持って人に接したり、人を価値あるものとして認める一方で、自分自身の価値について考えることも忘れてはなりません。モノを手に入れるためにおもに夜、歓楽街で働く女性、コンパニオンやホステスとしてお酒を注いだり男性の話し相手をしたり、ときにはもっとサービスすることもあります。そういう女性をテレビで見たり直接話したりするとがっかりします。男性が一本のワインに大金を支払ってホステスとおおっぴらにいちゃつくようなビジネスが流行っているのを見ると悲しくなります。男性はそういう女の子のためにさらに大金をはたいてプレゼントを買います。そういう場所で働く女の人も、そういう場所にたびたび出かけるような価値観ゼロの男性も見るのは不愉快です。

長い年月にわたって、人々は心よりもモノに関心を示してきたようにみえます。その結果、日本ではバブルの時期に、そして今日でもある程度は、ブランドの洋服や持ち物で人や自分の価値を決めてきました。特定のブランド好きの人や、ブランドものを持っていない人は価値がないと思っているような日本人を見たことはありませんか。あるいはこれ見よがしに持ち物をひけらかすお金持ちをよくテレビで見ませんか。私たちがどう考え、どういう人に価値をおくか、メディアの影響力が大きいことは明らかです。バブルの終焉が浪費文化の氾濫を終わらせたかもしれませんが、今日でもグッチのバッグやローレックスの時計を欲しがって女性がいて、それらを手に入れるために自らの価値など考えることなく、即金を求めて水商売のような仕事をしています。大方の人が仏教徒である日本において、日本人が、煩惱にとらわれないという仏教の根本的な信条のひとつを示さないことに驚きます。人々はかっこいい車や大きな家、いろいろなモノに執着したが、どういうモノを持っているかで周りの人の価値を決めるのです。

日本人であろうと日本人でなかろうと、障害者だろうと女性だろうと、対等に受け入れてもらえる場所は日本にはないのでしょうか。仲間と対等の価値があると認めてもらえたり、物質ではなく心に重きをおくような場所は日本にはないのでしょうか。その答えは「四国遍路」にあると私は思います。四国をぐるりと回るこの1400キ

ロメートルの巡礼道は88ヶ所のお寺と20ヶ所の番外のお寺、それに何百もの霊場で構成されています。この遍路道は真言宗の第八番目の開祖である弘法大師（774年～835年）が始めたといわれています。この遍路道の初期の歴史は定かではありませんが、17世紀から巡礼者の数は増え続けています。今日では、年間におよそ15万人の巡礼者が歩きや自転車、スケートボード、車、バスなどで訪れます。かつてはヘリコプターの遍路ツアーもあったくらいです。西国三十三ヶ所や秩父三十四ヶ所、あるいは坂東三十三ヶ所などの日本のほかの遍路道をさしおいて、四国遍路の何がそんなに人を惹きつけるのでしょうか。

1999年、私は「四国遍路におけるお接待の歴史(The History of Charitable Giving along the Shikoku Pilgrimage)」というタイトルの修士論文を書くために四国遍路の研究を始めました。“Charitable Giving”は私が「お接待」を表すために使う英語です。「お接待」とは、お金や食べ物や衣類のような現物でもよいし、無料の納経朱印や宿泊先、何らかの方法や行動でお遍路さんの手助けをするなど無形の親切を提供することです。「お接待」は世間で普通に言われている「接待」、つまり自分の利益のために食べ物やサービスを提供することとは異なります。たとえば、会社では取引先の人に食事をおごったり、将来の関係を考えてもてなしをすることがありますが、四国遍路はすべての人を歓迎し、どんなお遍路さんにもお接待を施し、多くのお遍路さんは自らの本当の価値を見出し、どうやって「モノ」を持たずに暮らし「心」を大切にするかを学んでいるのがわかります。

もう少し詳しく説明しましょう。まずそこには受容があります。ここ数年で、私はおよそ12名の、日本人以外の四国遍路成就者に会いました。私自身の経験とも重なるのですが、四国の人には外国人に恐る恐る接するということがなく、外国人と交わることに不快感を示すこともなく、また、外国人を「英語の練習台」に使うこともしません。ひとたび遍路の衣装を身に着けると、だれでもお遍路さんになり自分ではなくなります。これは日本人にとっても同じことです。ある日本人のお遍路さんの話ですが、その方は生涯お遍路さんでずっと四国を回っていて、生活はほとんどその土地の

人々からのお接待でまかなっていたそうです。お遍路の道々、彼は俳句を作り、それがメディアの注目を集めるところとなりました。あるテレビのレポーターが彼の取材に行き、それがNHKで放映されたのです。その番組を見たある警官が、その人が昔犯罪を犯して指名手配中であることに気づいて逮捕したので、平和なお遍路もそこで終わってしまったのですが、土地の人々は彼がどういう人か気にせず、一人のお遍路として敬意を払い、いつも進んでお接待していたのでした。もう1つの例はハンセン病患者さんです。この病気の人はいつい最近まで社会の一員としてみなされず、人の下にあるもの、生きる価値のないものとされていました。300年以上も前の江戸時代から、ハンセン病患者は村八分にされ、村を追われてハンセン病患者だけの収容所に入れられました。「視界に入らなければ存在しないのと同じ」という気持ちだったのは明らかです。ハンセン病患者が行くことを許された唯一の場所が四国にあり、ここでは自由に遍路することができたのです。彼らはお遍路さんとして受け入れられたのです。

話をお接待の習慣に戻します。日本人であれ外国人であれ、四国を訪れる人のほとんどが驚くのがこの伝統です。日本の他の地域では、かつてこの習慣があったけれど、遍路道が近代化し商業化するにつれて消えてしまいました。しかしながら四国では、お遍路さんに施しをすることは弘法大師にお供えすることという考えがあり、そのためもあって、300年以上もお接待の習慣が根付いてきたのです。4月のある日、私は二人のアメリカ人と一緒に、徳島の遍路道の一部を11番札所の藤井寺から12番札所の焼山寺まで歩きました。私たちが山のふもとにたどり着いたとき、一人の女の人が家から出てきて私たちに干しいもを手渡しました。さらにその先では、男の人が家に招きいれお茶をご馳走してくれました。私たちは玄関の小さなテーブルにすわって、目の前に広がる谷を眺めました。そこで一番印象に残っているのは、その男の人が戦争中に何百機ものB29が徳島を空襲するためにその谷の上空を飛行するのを見たという話です。彼はまた第二次大戦中に多くの兵士が彼の村からビルマに送られ、そのほとんどが帰ってこられなかったことも話してくれました。その話を聞いて、私

は私の祖父が体験したことを思い出しました。私は「戦争はなぜ起きるんだろう。」と思いました。戦争は双方にとってただ痛みと苦しみと死をもたらすのみであって、そこでは多くの人が価値のないモノとして扱われます。その男の人は私たち三人の外国人お遍路を自宅に招き入れ、私たちの国籍が何であるか、どんな過去を持っているか、現実社会での身分は何か、あるいはどのような物質的な富を持っているかなど、まったく気にしないで供物を提供し、ともに語らったのでした。

すべての人が平等に扱われ、互いに敬意を持ってみなぎ助け合う四国遍路の文化は検討に値するものだと思います。障害者や外国人、社会から自らを断絶しているひきこもりの人、自分探しをしている人、物質主義の社会から逃げ出そうとしている人、シンプルな生き方を望んでいる人、自らの価値を見出したいと思っている人たちが四国遍路にやってきていることに最近気づきました。四国遍路はなぜ特別なのでしょう。お接待の文化が人々を謙虚な気持ちにさせ、みなぎ同じゴールを目指しているという仲間意識によって勇気づけられ、自分が何者であるかを意識しないで旅をすることができるのが何よりも魅力的なのではないかと私は思うのです。

科学的に分析したらあなたの価値はほんの 500 円くらいです。でも遍路はあなたとあなたとは異なる人の本当の価値を教えてください。言い換えれば、あなたは人間の価値を知ることになるのです。